

## 相互行為現象としてのスティグマ

中河伸俊（大阪府立大学人間社会学部）

nakagawa@hs.osakafu-u.ac.jp

### 1. スティグマ論の不幸： 回顧と方針

[A] ゴフマンのスティグマ論（Goffman 1963）は、長年知られてきたが、必ずしもよく知られてきたとはいえない

『スティグマの社会学』は、先行する『行為と演技』（Goffman 1959）で展開された人びとのやりとりとコミュニケーションについての考察と洞察を、逸脱と排除というある意味で極端な現象にあてはめた、一種の応用編（中河 2006: 1）だった

それは、人びとの日常的かつ具体的なやりとり（相互行為）の中での行いを、「見せる」と「隠す」（およびそれと必ずしも等号では結べない「見える」と「見えない」<sup>1</sup>）に焦点を合わせつつ捕捉する試みだったという点に、その画期性と学的・応用的な貢献の可能性があった

[B] その後の研究史を見ると、その可能性は十二分に汲み取られてきたとはいえない

○批判や補完の提案：

(a) 結局個人レベルの分析だという批判 (ex. Oliver 1990) → 社会構造・文化・権力関係の考察へ [→ 政策的提言・文化的かく乱の提案 etc.]

(b) 当事者の主観的な経験への目配りが無いという批判 (ex. Spicker 1984, Wahl 1999) → 心理学的および精神医学的手法への着地 [→ 医療・カウンセリングと啓発教育]

(c) スティグマの変容性の認識と脱スティグマ化への志向が無いという批判 → 系譜学，社会問題のSC，運動にコミットしたアカデミズム [→ アイデンティティ・ポリティクスの実践=かなり (a) と重なる]

★ (c) は一理あるが、スティグマというタームを使ってゴフマンが見ようとしたもの（および、それと結びつけて考えられる受容と排除）が本来的に相互行為的現象である以上、それがどのようにして立ち現れるかについて十分にエンピリカルな把握を行うことなしに、変化や変革について語っても、あまり意味がない

[C] スティグマ論受容の「その後」の四つの方向（概観）：

(1) ゴフマンの研究関心をラベリング理論と同一視し互換的なものとみる： Scheff 1966; Suchar 1978; 大村 1979; Schur 1980; 石川 1985; 坂本 1986; Link and Phelan 2001; Falk 2001 など

(2) 心理学化、つまり人の「心の中」と対応させる形でスティグマにアプローチする： Spicker 1984; Jones et al. 1984; Herek 1998; Pinel 1999; Crocker 1999; Wahl 1999, Heatherton et al. 2000; 内田 2002 など<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 『行為と演技』の冒頭での「give」と「give off」の区分を参照。要するに、私たちは、相互行為の現場で透明人間であることはありえず、意図するとせざるとに関わらず、必ず自分が何者であるかについての何らかの“情報”を“放出”してしまう（あるいは、そうした“情報”の読み取りが可能な存在としてやりとりの場にいる）。

<sup>2</sup> ただし、『スティグマ』の中に、こうした方向への展開を許す部分もあることは否定できない。

(3) 相互行為過程への関心を受け継いだエスノグラフィックな探究やインタビュー調査： Davis 1961 (これはむしろ平行もしくは先行研究だがきわめて重要)；Schneider and Conrad 1980, 1983; Miall 1986; Gardner 1991; Blum 1991; Shaw 1991; Angrosino 1992; Herman 1993; Mitteness and Barker 1995; Nack 2002; 石川 2003; 澁谷 2004; 鶴田 2004 など

(4) スティグマ化に利用可能なカテゴリーをめぐる歴史研究 (いわゆる言説史)： Foucault 1961; Hacking 1995; 赤川 1999; Conrad and Schneider 1980; 社会問題の SC (中河 1999) のある部分

★ (1) の問題点： ラベリング理論には、(1)レッテル貼りの過程を権力関係の問題に還元する傾向 (その結果「逸脱を作り出す」公的機関や専門家の活動 (の一方性) に研究の焦点が合わせられ、当人の自己呈示ややりとりのダイナミズムはなおざりにされがち→「社会構造的な説明」への再接合へ)、(2)ラベル=ことばというイメージにとらわれてレッテル貼りを言語 (のみ) による過程として理解しがちな傾向、そして、(3)レッテル貼りという行いを対象や相互行為的な文脈から独立に概念化する傾向がある (ex.「恣意的なレッテル貼り」という発想)。 いっぽう、ゴフマンにとって、スティグマ的属性は、ある意味で、ラベリング論がレッテル貼りとしてとらえるような行い以前に「すでにそこにある」のであり、そのしるしの読み取りをめぐる隠蔽と開示の情報ゲームと、その相互行為的な環境とがテーマ化される。そして、そうしたゲームの考察にあたっては、言語的な記号だけではなく、五感に訴えるもの (たとえば服装、容貌、しぐさ、なまり、発話の不明瞭さ、匂いなど) や、物理的な舞台装置や小道具 (たとえば車椅子や住居のロケーション、その景観など) にも目配りがなされる。つまり、ラベリング理論への吸収は、スティグマ論の長所である強い具体性への志向を水泡に帰させかねない。

★ (2) の問題点： 旧態依然の偏見・差別意識論やステレオタイプ論にスティグマという語を冠しただけのものもある。<sup>3</sup> 心理主義は (言語派社会学の立場に立つなら) 一種のカテゴリー・ミステイクの上に成り立っており (Coulter 1979)、現象の観察可能性がない (中河 2004)。百歩譲ってこのアプローチの意義を認めるとしても、それはゴフマンの固有の貢献を生かす道ではない。

★ (3) がしっかり行われ出したのは、比較的近年

主要論点の一つを先取りするなら、(3) + (4) がとるべき道 (ただし後者は、そうすることが一定のテクニカルな困難を伴うものであるとはいえ、あくまで前者の視点を潜ったものでなくてはならない) ○この方向で、現在の学的視界を前提にして、有効な経験的研究を進めるためには、どのようなことを考えておかなければならないか、いくつかの示唆をすることが、この報告の目的

## 2. 自己アイデンティティ (ID), しるし, ふつうの見かけ

### [A] 相互行為と文化構造

(i) on-going な「そのつど」的達成としての自己 (Holstein and Gubrium 2000a) と、コンスタントとしてのスティグマとのジレンマ? <sup>4</sup> (しかもゴフマンにあっては、スティグマは他の「属性」をのりこえる overriding もんとして概念化される傾向にある! =文化決定論的)

この二つの板ばさみは、私見では、擬似ジレンマにすぎない (=状況内での相互行為的達達成について)

<sup>3</sup> 偏見・差別意識論やステレオタイプ論 (Adorno et al. 1950; Allport 1954; Crocetti, Spiro and Siassi 1974) とそれに基づく実践の問題点については、佐藤 (2005) を参照のこと。

<sup>4</sup> スティグマとパッシングをめぐるゴフマンとガーフィンケル (Garfinkel 1967) の方法論上の対立も、基本的には、この論点に関わるものといっていだらう (Travers 1994)。

ての整理された理解があれば、ジレンマは生じない)

(i i) いくつかの前提：(1)人が何者であるかということ(自己ID・役割ID)と、その場はどのような場かということ(いわゆる状況の定義)、そして、その場での行い・活動は何であるかということは、参加者のやりとりとコミュニケーション(Goffman 1959にいう“広義”の)のなかで／を通じて、同時進行的・相互反動的に達成されつづける(つまり、わけが分かるものにされつづける)、(2)人はさまざまなものでありうるが(cf.ジェイムズ/ミード以来の米国土着社会学の多元的自己論)、しかし、人が特定の何者かであるということは、特定の場での人びとの活動のレリヴァンスや関心・要請の中でのみ可能になる(しばしばある種のIDは、ある種の活動の組織化の要件ですらある ex.報告者・司会・学会員やその他の研究者といったIDが前提されていなければ、この学会大会セッションの場はわけがわかる **accountable** ものになりえない)、(3)具体的なやりとりとコミュニケーションは、真空の中で行われるものではない(それは、具体的な時の流れの中で、過去の出来事の時系列を参照し相互確認しつつ、当のその場で歴史的・物理的・相互行為的に利用可能なリソースを利用して行われる)<sup>5</sup>

[B] スティグマ的属性が発見可能(**discoverable**)だとはどういうことか?

(i) 『スティグマ』の議論の基本的構図：“見えている”社会的ID(**virtual social identity**)と“見えていない”社会的ID(**actual social identity**)の齟齬モデル(こうした齟齬が個人(**person**)というものの自体の立ち現れを可能にする = 私たちは選択的および偶発的に、見せること、つまりは見せないことを通じてはじめて何者かであることができる、というのが、ゴフマネスクの要諦)

この齟齬(ギャップ)がありうることによって可能になる事態の類型：(1)パッシング(隠蔽)、(2)カムアウト(隠蔽から開示へ)、(3)スティグマ的属性が相互行為の場の中に「ある」状態(開示)

ただし、(3)は、そうした属性やそのしるしがつねにやりとりの中に現前することを意味しない：カヴァーリング、緩和された呈示、礼儀正しい無関心(**inattention**)、後景化<sup>6</sup>、物理的配置やメディアの属性によって可能になるマスキング<sup>7</sup> → ここに、相互行為的ノーマライゼーション(**interactional normalization**)の大きな余地をみることができる

(i i) 発見可能なスティグマ的属性が「ある」といえる(つまり、それが「ある」とみなせるようにするために利用可能な)根拠：(1)文化的なカテゴリーのシステム(あるいは、成員性カテゴリー化装置を含む広義の言語的リソース)、(2)カテゴリー化と結び付けられたさまざまな制度的活動(ex.刑事司法、精神医療)<sup>8</sup>とそれが産出する記録(ex.判決等の文書、カルテ)、(3)「個人」を産出し同定する制度的<sup>9</sup>・日常的活動や前者に伴う文書記録や電子記録(ex.個人名、出生届、住民登録)、(4)「IDのかけ釘」としての個別的な身体の見かけや属性、(5)スティグマのしるし(**sign**)として利用可能な種々の「小道具」

<sup>5</sup> ちなみに、少なからぬ数の理論社会学者が好んで論じてきたパーソンズのダブル・コンティンジェンシーの問題構成は、こうした具体性から抽象されたモデルが生む擬似問題にすぎない(なぜパーソンズの思考実験のような事態がありえないかの根拠は、たとえば注1のようなことである)。

<sup>6</sup> その場の活動の中での実践的関心の焦点から外れ、あまり注意を払われなくなること。

<sup>7</sup> パッシングとこうしたカヴァーリングや礼儀正しい無関心とは、ゴフマンののちの枠組分析(Goffman 1974)のタームでいえば、偽装(**fabrication**)と転調(**keying**)とに対応する。ただし、両者はしばしば連続体であり、『スティグマ』にもその点についての指摘がある。

<sup>8</sup> ここで制度というとき念頭においているのは、グブリアムらが『家族とは何か?』(Gubrium and Holstein 1990)でいう、相互行為の場に埋め込まれた“制度化された思考”のようなものである。そのイメージを具体化するのに、ルーマンの社会システムの下位システムについての考え方が参考になるだろうと考えているが(中河 2003)、まだこのあたりを突っ込んで考えることはできていない。

<sup>9</sup> こうした研究の例に、渡辺(2003)がある。

や「舞台装置」(Goffman 1963)

☆個人のバイオグラフィーを構成しつつ、呈示したり訊ねたり聞いたりするという行いは、公的・私的なさまざまな営みの中で幅広く行われる (ex. Holstein and Gubrium 2000b)<sup>10</sup>： こうした作業を通じてのバイオフィク的な情報の伝達が、スティグマ的属性の「発見」の一つのルートになる

(i i) しかし、スティグマおよびその発見可能性は、あくまで状況内的な効果

ゴフマンは、きわめて微細な領域にわたる相互行為の観察者、および、デュルケム～M・ダグラスの流れを汲む文化構造(集合表象)論者、という二つの顔を持っている / 後者の立場から語るときには(『スティグマ』の初めの部分でそうしているように)、人びとが社会化を通じて身につける文化的カテゴリー(『行為と演技』という理想化)こそが、スティグマの起源ということになる / しかしながら、本節冒頭でみたジレンマの構図([A]の(a))にはまらないためには、文化構造論的な想定を取り外す必要がある

スティグマ的属性として利用可能であるかもしれないものを有意味(もしくは適切 relevant)にするのは、状況内の(そしてその状況を組織化する)相互行為である (Francis and Hester 2004) / スティグマ的属性の達成だけでなく、その隠蔽すらも、そうした個々の場の有意味性構造とでもいうべきものと無縁ではない(自分が「朝鮮籍」の「在日」であることは、タバコ屋でラークを買うときやゲーセンで格ゲーをするときよりも、職場の同僚と食堂で昼食をとりながら見ていたTVニュースで、拉致被害者の家族がアピールをしたあとの拉致問題をトピックにした会話の中で、よりいっそう「隠されるべきもの」になるだろう、といったぐあいに)

文化的カテゴリー(あるいは、EM的にいうなら、成員性カテゴリーとそれに結び付けられる「述部」)は、あくまで、人びとがやりとりを織りなしていくための材料(リソース)にすぎないし、スティグマ性は(それがどんなものであれ)そうしたカテゴリーの使用(カテゴリー化の実践)の中で実現されるものである<sup>11</sup>

[C] スティグマとふつうの見かけ

(i) ゴフマンの「スティグマ」によるアプローチが「逸脱」や「異常」<sup>12</sup>によるものより望ましいと考える理由の一つは、その概念的ゆるさが、文化構造論を抜け出すのに好都合だから<sup>13</sup> (=相互行為アプローチへの転轍機としてのスティグマ論)

ゴフマンのスティグマ論を相互行為についての議論として徹底させるなら、スティグマ的属性は、やりとりとコミュニケーションのふつうの流れを阻害する(あるいはそうしたポテンシャルをもつ)個人に帰属された属性として位置づけられる / いいかえれば、ゴフマンにとってそれは、はなはだしいときにはやりとりをぶち壊す修羅場を引き起こし (make a scene), そうでなくとも当惑や微妙な軋轢や不信や不安やぎこちなさなどをもたらす、まさにそうした性能によって、スティグマ的なのである

(i i) このスティグマの定義は、やりとりに参与する人びとの具体的な行いに照準したものだという

<sup>10</sup> ここでは十分に触れるスペースがないが、『スティグマ』におけるバイオグラフィーについての議論(や『アウトサイダーズ』(Becker 1963)の道徳的キャリアについての議論)は、こうした観点から再構成される必要がある。

<sup>11</sup> これは、後に3(b)で述べるように、いわゆるマイクロ=マクロリンクの図式を採るということではない。

<sup>12</sup> たとえば上野(1980)。

<sup>13</sup> 逸脱は、これまで社会学では、(1)規範を基準にする違反や乖離、(2)何らかの対象へのネガティブなサンクションとしてのレッテルの貼り付け、という二つのやり方で定義されてきたが、どちらも文化的カテゴリー(構造)論の範囲内に収まる説明様式である。

点が(本報告の立場からすれば)メリットだが、ネックになりかねない部分もある → それはそれが、相互行為における「ふつう」を同定することができる、という想定に依拠して成り立っている概念だという点である

では、「ふつう」って何? : 「ふつう」は定義しにくい(「だれか、ふつうを教えてくれ!」という本のタイトルがある(倉本 2006)のも不思議はない) / 「ふつうの状態」とはおそらく、『「ふつうではない状態」ではない状態』だとしかいえないようなもの

(i i i) ステイグマ論の試論的改訂: 「ふつう」をめぐる参加者の行いや活動に注目する

とりあえず、以下のような参加者のふるまいが、当該の属性の実質的なステイグマ性を構成する(したがってそうしたふるまいを、参加者がやるのと同じやり方で観察することによって、ステイグマ現象を見つけることができる) と考えることにする

(1) 状況において不適切な個人の属性がやりとりの場に現われていないとき: 参加者のだれかがそうした「見かけ」をそのまま(at face value)受け入れずに、特定の個人が「ほんとうは」不適切な属性を「持って」いないか探索行動を始める and / or 不適切な属性を「持って」いる当事者が、他者の探索活動を感知し(detect), もしくは想定して、さまざまな隠蔽活動(Garfinkel 1967)を行う

(2) 状況において不適切な個人の属性がやりとりの場に、暗にもしくはあからさまに立ち現われてるとき: 「見て見ぬふり」やさまざまな中和化の作業、その属性の不適切性の指摘や道徳的非難、相互行為の中断、相互行為の中での(されには相互行為からの)不適切な属性を持つとされる個人の排除(佐藤 2005)等々が行われる

後者の場合の、とりわけ不適切性の指摘や非難・排除などにおいては、しばしば、さまざまの形で問題の個人が「ふつうではない」ことを示すカテゴリカルな定式化が利用される<sup>14</sup>

とりあえず、「ふつう」の相互行為とは、(1)(2)がみられないような相互行為だと考えたい(といっても、その種のことは程度の差こそあれ多くの相互行為において見られるだろうから、「ふつう」はつまりは動的な程度概念である)<sup>15</sup>

ここでの要諦の一つは、その「ふつう」でないことが、“ステイグマ属性”として、何らかの形で同定可能な特定の個人(person: 『ステイグマ』でいうなら personal identity)に帰属されているということである(その「個人」が公共の場における匿名の人間であるか、固有名で特定できる「係わり合い」の人であるかはたぶん大きな違いだし、また、その帰属が、その場でのやりとりのさまざまな要素の帰納的によって行なわれるのか、その人の身体に“刻まれて”いるのか、あるいは制度的活動に裏書されたカルテや身分証、履歴をめぐる公的書類のたぐいによって帰属されるのかも、開示や隠蔽の方法と深く関わる重要な要素になってくるだろう)

#### [D] 「ふつう」の想定とステイグマのしるし

<sup>14</sup> ラベリング論がいう各種の「逸脱のレッテル」(ある種の成員性カテゴリー)の使用もそうした定式化の一部だが、それが使われることが即「ふつうでない」やりとりとは限らないことに注意されたい。たとえば、刑事司法過程の中でのやりとりにおいて、その場に犯罪をおかしたとされる人がいるのはふつう、あるいはむしろ必要なことであり、各種の犯罪者のカテゴリーは、状況にとって不適切ではなくむしろ適切である。

<sup>15</sup> シェフ(Scheff 1966)は、その精神病のレッテル貼りについての議論の中で、ここにいうような「ふつうでないこと」を、残余的規則(residual rules)の違反として概念化した。筆者は、こうした捉え方にはよい点とミスリーディングな点の両方があると考え、この報告の立場からすれば、彼の議論の最大の問題点は、精神科医(あるいは精神医療)によるレッテル貼りに焦点を絞って、個々のやりとりの場での、個々の多種多様な「違反」やそれを成り立たせる「ルール」の使用の具体的な詳細を探究する道筋を切り開かなかったことである。

(i) 「ふつう」の想定は、ゴフマンにおいてもEMにおいても、人びとのやりとりの「ふつうの見かけ」の理解にあたって重要な役割を果たす論点<sup>16</sup>

私たちは、日常のやりとりの多くの局面において、特段にそうでないと考えべき（あるいは疑うべき）理由がないかぎり、そこでの人びとの活動や属性・ID、状況の定義（場についての定式化）を、そのみかけどおりの「ふつう」のものだと想定する（私たちは見かけを疑ったり、「見かけの奥にあるもの」を探索したりもするが、しかし、四六時中ありとあらゆることについてそれをすることはできない＝そういう意味では、「信頼」が相互行為の基盤 see Goffman 1959; Garfinkel 1963）→ その想定を、その場で行なわれていることを「わけがわかるもの accountable」にするための材料として使う

(i i) この「ふつう」の想定は、パッシング（およびカヴァーリング）の豊かな土壌になる /ただし、信頼モードの「ふつう」の想定は、参加者が「何かがおかしい」と思ったときは、たやすく撤回され、疑惑モードの観察と探索が始まることありうるような、「とりあえず」的なものでもある： 鶴田（2004）によるトランスジェンダーの人のパッシングの研究は、こうした二つのモードがあることを指摘したという点で、画期的<sup>17</sup>

ゴフマンのいうスティグマのしるし（sign, 徴候あるいは記号）は、この信頼モードから疑惑モードへのいわばスイッチ切り替えの契機になることもあるだろうし、また、疑惑モードに入った人の探索行動における、「スティグマ的属性を持った人間」を構成する（stigmatize）帰納的判断のリソースの一端になることもあるだろう

(i i i) カテゴリー、属性、しるし

『スティグマ』についての（あるいはそれを援用した）議論の多くでは、この三つが互換的なものとして理解されている /が、おそらくそれは不適切（ゴフマン本人もかならずしも整理された論の展開をしていない）

<sup>16</sup> ここで本当は、山口（2006）がロールズの議論を参照しつつ指摘する、「ふつう」の基準の文化的多元性の問題についても吟味しておくべきなのだが、紙幅がない。そこでここでは、山口は、(1)相互行為秩序を単一の文化のシステムの関数として見がちな初期ゴフマンのミクロ機能主義（相互行為儀礼論）を踏襲しているようにみえるが、それは人びとの相互行為の実際と照らし合わせるとおそらく単純すぎる図式化であること（その点で、後述の鶴田が、ゴフマンを使うときは相互行為儀礼論やフレーム分析ではなく自己呈示論を使うと知っているのは一つの見識である（2004: 205)), さらに、(3)この点についての山口の議論を全面的に認めるとしても、「主流白人とアフリカ系の相互行為秩序の違い」をかれがいうような他のさまざまなマイノリティの“文化”に拡大するのは飛躍がありすぎる（さらにいえば、その図式では、“仲間の文化”とのコンタクトがない個人的なスティグマ属性保持者の問題は論じられなくなる）といった難点を指摘しておくだけにとどめる。

<sup>17</sup> 鶴田は、社会的世界を基本的には一瞥で読みとられるものだとするゴフマンの理解を足がかりにして、他者が何者であるかを「見る」識別作業には、「一瞥による判断」と「帰納的判断」の二つの種別があるとする。前者は、一目で「おかしい」あるいは「ふつうでない」と見えなければその行いや人や事物や出来事は「ふつう」なものである（もしくはそのようなものとして取り扱い可能である）という日常的な想定に基づいた識別（identification）のあり方であり、後者は、一見して「何か（歴然とまたは微妙に）おかしく」見えてしまったとき、どこがおかしいのか、その行いや人や事物や出来事は「ほんとうは」何なのかを、その対象についての断片的情報をモニターし帰納的（および相互反動的）に集約しながら探り当てていくような識別のあり方である。ガーフィンケルは、アグネス論文で、パッシングを持続的達成として描き出したが、そこで示されているのは、『誰もが女だと思いに違いない』『…』『ノーマルな外見 [ふつうの見かけ——筆者]』をすでに持つ者が、女ではないと『帰納的判断』されないように、いかに上手く立ち振舞ったのかということであったと言える（鶴田 2004: 24）。これは、ゴフマンとガーフィンケルの二つのパッシング論の位置関係の整理として、説得力がある。公共空間でのパッシング（Gardner 1991）か、より密接な関係の中でのパッシングかによって事情は変わってくるだろうが、とはいえ、一瞥のレベルで「疑いをもたれないようにすること」がトランスジェンダーのパッシングの要諦だという、ゴフマンの「第一印象が大切」という指摘（Goffman 1959）を生かした鶴田の知見は、パッシングにおける「ふつうの想定」の役割の大きさを再認識させてくれる。

まず、ゴフマンのいうスティグマの3類型 (physical deformities / blemishes of individual character / tribal stigma) を再訪してみよう / きわめて多様なこれらを一つの枠組で括ってしまえるのは、ゴフマンが、やりとりとコミュニケーションの流れの障害を抛り所にして、論を立てているからである (本節 (i) 参照)

しかし、スティグマ属性=カテゴリーなのか、スティグマ属性=カテゴリーのしるし (可視的表示) なのかは、あいまいである

ここで、『スティグマ』の冒頭に掲げられている (筆者にはどうしてもあざといつかみに見えてしまう) 鼻のない少女の事例について考えてみよう / 「鼻がない」<sup>18</sup> というのは、人や人に帰属 (attribute) される属性のカテゴリーだろうか: 文章や口での語りの中での言及はさておき、対面的なやりとりの中では、それは、まさしくきわめて具体的なそうした様相であり、見かけであり、あり方なのである (そうした様相や見かけやあり方のやりとりへの影響 (というか立ち現れ) は、カテゴリーのような概念的なものを、必ずしも介する必要がない)

いっぽう、「前科者」・「ペド (幼児愛好者)」・「テロリスト」・「反日」や「ユダヤ人」・「イスラム教徒」・「在日」はどうだろう<sup>19</sup>: こうした人たちは、かならずしも見てそうとわかる見かけをしているわけではない / そのやりとりへの立ち現れにあたっては、カテゴリーの使用、しるしの読み取り、そして、バイオグラフィーの構成といった方法が、大きな役割をしめることになる<sup>20</sup>

< IDカテゴリー-属性-しるし > (たとえば、< 「身体障害者」-下肢の筋肉麻痺や損傷-車椅子や杖 (ex. Murphy 1987) >) を同じものとして等号で結んでしまわないことは、経験的観察にとって有益である / さらに、文化的な ID カテゴリーの意味づけの変更 (それ自体は運動のスローガンや目標として有意義な役割を果たしてきたが) が問題解決のアルファでありオメガである、というような一面的な議論に陥らずにすむというメリットもある<sup>21</sup>

ただし、それらは実際にはしばしば重なり合うし、さらには、それらの立ち現れ自体が、状況内的で相互反映的なもの (そのそれぞれがお互いを「わけがわかる」ものにしあう意味の循環的なゲシュタルト構成の材料) なのである

スティグマ現象に関わるしるしの利用とカテゴリー化は、定義の問題であるよりは、すぐれて経験的観察の重要なトピックの一つなのである

### 3. 足つぎとして使ったあと脇へおく: 感受概念, 歴史研究, そして応用

#### [A] スティグマ論の射程と限界

<sup>18</sup> あるいは顔に目立ったあざがある (石井 1999), あるいは吃音 (渡辺 2003), あるいは禿頭 (須長 1999)。

<sup>19</sup> これはそれぞれ、ゴフマンのいう blemishes of individual character と tribal stigma にあたる (両者の区分はよく考えるとあいまいだが、おそらく achievement と ascription の二分法が援用されているのだろう)。

<sup>20</sup> ここで、ガーフィンケルのアグネスの事例をみておこなら、それが、ふつうのやりとりではしるし (もしくは属性そのもの?) である男性性器が観察されることはない (だからバイオグラフィーの構成や種々の「女性」カテゴリーにとって適切なコンピタンスの表示がパッシングにとって戦略的に重要になる) という意味で、個人的スティグマや部族的スティグマと似通った事態にあるが、更衣や入浴といった特定の場では、それが直接現れる可能性があるという独特のケースであることがわかる。

<sup>21</sup> ゴフマンがスティグマをしるし (sign) というきわめて具体的かつ状況内的なものとして捉えていることは評価に値する。しかし、このいいまわしは、いっぽうで、記号論的なシニフィアン (示す媒体としてのしるし) / シニフィエ (しるしによって示されるもの) の構図を呼び起こすものでもある。相互行為の観察に忠実な立場をとろうとする調査者は、(構造主義的ないわゆる現代思想等を経由して) この経験的に不毛な構図に入りこまないよう気をつけなくてはならない。

(i) その最大のメリットは、社会人類学のエスノグラファーとして出発したゴフマン（渡辺 2004）の、相互行為の具体性への一貫したこだわり

それによって、抽象的である種「きれいごと」である意識をめぐる議論に終始するのではなく、実際のやりとりの中で人びとが見聞きし、感じ、そして行いと活動のコースへと繰り込んでゆくありとあらゆる事柄を、スティグマ現象の観察と考察の俎上にあげることが可能に / やりとりにあたっての身体的配置、テリトリーやさまざまな相互行為上の権利をめぐるルールや侵害、服装、見かけ、言葉づかいから、従来の社会学では視野の外にあったにおいや「失禁」（Mittleness and Barker 1995）といったことに至るまで<sup>22</sup>、「変」、「ふつうではない」、「きたない」、「嫌」等々の達成に関わって人びとが行う「ゲーム」をつぶさに見てゆくことが、このアプローチの第一の任務である<sup>23</sup>

(i i) ちなみに、ナラティブ（語り）に注目する、差別論や福祉・医療研究などの分野でのライフ・ヒストリー（あるいはライフ・ストーリー）系の研究は、こうした具体的な相互行為の観察を志向しない / インタビューを通じて、(1)語り手のライフ・イベント、(2)語り手のパースペクティブや生きられた経験、(3)インタビューの相互行為的達成やそこでの権力関係、(4)ドミナント・ディスコースやそれに回収されないマージナルなディスコース、といったものを掬い取ろうとする / しかし、なぜ、エスノグラフィックな自然主義的観察<sup>24</sup>を通じて、人びとがしていることをみようとするより、そうしたインタビューへの専念のほうが、社会的に価値があると思えるのだろうか（「差別」や「福祉」や「医療」の何を調べたいのか？）

(i i i) ただし、スティグマ論には、そうしたメリットと同時に大きな限界もある

多種多様なものを、やりとりとコミュニケーションの中での隠蔽と開示という観点からすれば似たパターンが析出できるという理由で、いわば形式社会的に<sup>25</sup>一括するというのが、『スティグマ』のやり方： このやり方で見えてくるものは限られている / ゴフマン自身は、「スティグマに関する材料をそれに隣接する事実と区別し、この材料が一つの概念枠によってどれほど簡潔に記述できるかを示し、さらにスティグマと逸脱の中心問題の関係を明らかにしてみたい」（Goffman 1963=2001: 1）と、『スティグマ』を一般理論化の試みの一里塚（notes）だと示唆している / しかし、「スティグマ」というタームで括られる現象の気の遠くなるほどの多様さを思うとき、“スティグマの一般理論”のようなものは見果てぬ夢だといわざるをえない（こうした枠組みでいえるようなことは、『スティグマ』で大体いわれてしまっているともいえるだろう） / 2 [B] (i i i) で述べたように、スティグマ現象を個別・具体的な状況の効果として理解するなら、なおさらそうである（「ふつうでない」ことは、圧倒的に多様である）

三橋（1992）が（シェフを承けて）指摘するとおり、スティグマは感受概念（Blumer 1969）であり、スティグマ論は感受理論なのだと思えるほうがよい（というか、体系だった「理論」というようなもので

---

<sup>22</sup> ゴフマンを足がかりとする近年の研究動向の一つに、英国系の身体社会学がある（速水 2006）。筆者はまだ十分にその成果を検討できていないが、今までにみた限りでは、身体がこの「におい」のような個別的な具体性を持たずかなり一般的な概念として使われているように感じられ、その点にゴフマンとの懸隔を感じざるをえない。

<sup>23</sup> もちろん、そうした人びとのいとなみの観察と、そこでの人びとの行いとそれが含む「評価」を正当化することは、まったく別の事柄である（スティグマの観察が、「相互行為秩序」をめぐる人びとのいとなみの現状肯定を帰結するという山田・好井（1993）の論難は、一種のいいがかりだといえる）。

<sup>24</sup> ゴフマンは、生涯にわたって、この方法の擁護者だった。

<sup>25</sup> ゴフマンが、ラドクリフ＝ブラウンとウォーナー経由でデュルケムに親しむ一方で、ジンメルをよく読んでいたことは知られている（シカゴ学派の伝統からして不思議なことではないが）。



はなく、感受的なタームや指摘や観察やエピソードの豊富な集積だといったほうがいいかもしれない<sup>26)</sup>

(i v) いいかえれば、ポスト『スティグマ』の研究は、ゴフマンがその枠組みでカヴァーするとした多様な現象の個別的な具体性を探究する方向へむかうべきである。／ゴフマンのスティグマ論は（さらには本報告の試論も）、そうした対象の具体性の入り口を首を伸ばして見つけるためのいわば「足つぎ」のようなものであり（sensitizing concept はそうした用途のためにある）、一旦うまく自分の入り口をみつけて入り、前へ進みはじめたら、捨て去ってしまってもかまわないようなものなのである

## [B] 歴史の位置は？ 相互行為研究と利用可能なカテゴリーの系譜学

(i) 1の[C]で、スティグマ論の四つの受容の方向を振り返り、そのうち、(3)（相互行為のエスノグラフィックな研究）と(4)（カテゴリーの歴史的研究）との組み合わせが、本報告が推奨する進路だと述べた

もちろん、両者は相対的に独立した研究の進路である

(i i) ただし、人びとがスティグマ現象を構成する作業の中で、なんらかの形でカテゴリー（あるいは成員性カテゴリー化装置 Sacks 1995; Hester and Eglin 1997; 中河 2005）を使用するとき、そのカテゴリーはもちろん、その場で作られたものではない。／参与者は、過去の無数といっていいほど多くの相互行為の流れの中で（それを歴史といいかえてもいい）使われ伝えられてきたカテゴリーを、その場での適切性（乱暴ない方をすれば、「物事のわけがわかる」ということ）に照らしつつ使用する。／ない袖は振れない、つまり、それを使う人自身や他の参与者が知らないカテゴリーは、当然ながら使われることはない

ここで、いわゆるマイクロ=マクロリンクのような構図を想定してはいけない（中河・山本 2004; 中河 2004）。／カテゴリーが「ある」ということと、数多くの個別のやりとりの場で特定のカテゴリーが使われるということは、同じことなのである<sup>27)</sup>

とすれば、(3)のエスノグラフィックな相互行為研究に携わる研究者は、特定の場での具体的なカテゴリーの利用可能性（とその利用のコノテーション）を見積もるために、ある程度は、(4)のカテゴリーの系譜学的研究に首をつっこまざるをえない

「非行」や「児童虐待」、「いじめ」、「精神遅滞」、「ホームレス」、「ストーカー」、「有害な喫煙」、「PTSD」といったさまざまな社会問題のカテゴリーの生成過程の研究は、いわゆる社会問題の構築主義の重要なレパートリーの一つだったが、それらを「述部」とし、それらに結び付けられる人のカテゴリー（成員性カテゴリー）の使用に着目して相互行為を見てゆくことは、今後のスティグマ現象の研究のメインラインとっていいだろう。／ここに、(3) + (4)の一つの必然性がある

(i i i) いっぽうに、(4)に特化した、言説分析などとも呼ばれる（ex. 赤川 1999）知の系譜学的研究がある。／こうした試みには当然、スティグマ化にしばしば実用されてきたカテゴリーの歴史の研究も含まれる（ex. フーコーの『狂気の歴史』）。／歴史研究は、主に書き残されたものに依拠して行わ

<sup>26)</sup> これは、けなしているのではなく、むしろ褒めことばである。ゴフマンの観察がいかに鋭いかについては、自身の難病経験をフィールド調査の対象にした人類学者、マーフィーも認めることである（Murphy 1987）。なお、マーフィーは、同書で、スティグマ概念が、逸脱者と病者・障害者を同じ枠組みで論じることを不適切だと批判し、ターナーのリミナリティ論やダグラスの汚穢の理論を使って後者を説明しようとするが、その指摘は、筆者には、半ば正しく、半ば見当外れであるように思える。スティグマ論が、多種多様な現象を一括するものである以上、個々の現象に即した考察がないという批判は正しいが、しかし、隠蔽と開示というゴフマンの課題設定を受け入れるなら、その範囲内では、たとえば前科を持つ人と難病者（e.g. Schneider and Conrad. 1980）を同日に扱うことは必ずしも不適切とはいえない。

<sup>27)</sup> プラトンの「アイデアの世界」のようなものの存在を信じないかぎり、そう考えるしかない。

れざるを得ない、というテクニカルな問題はある（過去の相互行為は消え去って、それほど多くの痕跡を残さない）／にもかかわらず、「書かれたものの世界」（言説空間）のようなものを想定して、そこに研究の照準を固定しようとする試みは間違っている／過去の人びとは、その時代時代に、かれらの間で数多くの相互行為を重ねてきたのであり、何かを書き残すという活動は、あくまでその一部にすぎない／それを前提にして、わずかな痕跡からかれらのゲームを学び、失われた相互行為とそのレリヴァンス（意味的な適切性）を再現しようとするのが、歴史研究には不可欠である（つまり、(3)をくぐった(4)が、カテゴリーの系譜学の目標であるべきだろう）

(i v) こうしたカテゴリーの系譜学は、別の角度からみるなら、「スティグマ的属性〔としばしば“制度的”にされるもの〕を発見するテクノロジーの歴史」（中河 2006: 10）でもある／それとはまた別に、より大変な作業であるが、『『ふつうであること』自体の歴史的变化』（ibid.）をたどっていくという研究のアプローチ<sup>28</sup>も考えられる

以上、三つの研究の焦点を挙げたが（(1)スティグマ化に制度的に使われがちな（がちだった）カテゴリー（化装置）の系譜学、(2)そうしたカテゴリーを発見するテクノロジーの歴史、(3)表出の「ふつう」の水準の歴史）、これだけをとって見ても、スティグマ論をヒントにした歴史的研究の可能性は豊かといってい

#### [C] 相互行為的ノーマライゼーション

(i) この報告は、個別のスティグマ現象とそれが達成される具体的場面（たとえば、「障害者」と「健全者」の統合キャンプや、要援助のホームレスのインテイク面接、認知症患者の家族の会の会合、クラスルームでの「てんかん」の生徒といったように）でのやりとりを観察（それが難しい場合は回顧的インタビュー）するアプローチを推奨する／それは、現象および場面特定のであるがゆえに（そして研究者の理論を媒介にせず人びとがやっていることを捕捉しようという試みであるがゆえに）、そこにおけるスティグマ化や脱スティグマ化の方法の観察は、いわゆる「現場的」な応用可能性に向かって開かれていると考える

(i i) やりとりやコミュニケーションの方法（参与者のカテゴリー化のされ方＝IDの呈示のされ方<sup>29</sup>、順番とりや発話権、敬意(deference)とたしなみ(demeaner)などを含む）とテクノロジー、物理的な配置、見かけの操作等々、相互行為の具体性に根ざした方策によって、スティグマ属性であったかもしれないものをレリヴァントでなくしたり、カヴァーリングや善意のパッシングを達成することができる／そのためには、繰り返しになるが、ゴフマンの示した一般化の先の個々別々の具体性へ深く踏み込んでいく必要がある／もちろん、参与者間の慣れや親密さが「ふつう」の達成に大きな役割を担うのは確かだが、あらゆるやりとりの場でそれが保障されるものでない以上、こうしたやりとりのテクノロジーを意識化することには、それなりの意義があるはずである

(i i i) ただし、一般理論であることが効を奏するようなアプローチもあるかもしれない／きわめ

---

<sup>28</sup> 「たとえば、服装や身だしなみやメイクや歯並び、顔の造作により手をかけられるようになるとか、公共の場所に掃除が行き届き美観が尊重されるようになるとか、清潔を保つための努力が以前より払われるようになりそのための技法や商品が開発されるとかいったように、表出の「ふつう」はしだいに变化する[中略]。「ふつう」の変化[中略]によって、スティグマの可視性が高まったり、隠蔽の努力がよりコストがかかるものになったりする。」（中河 2006: 10-11）こうしたことはすべて、きわめてゴフマン的な研究のトピックである。

<sup>29</sup> これは、参与者の権利や義務の表示に関わるものであり、EMで「参与フレーム」（西阪 2001）と呼ばれるものと不可分である。

て野心的な佐藤 (2004) の差別 (排除) の理論は、スティグマ論と重なり合う領域を取り扱っている / その有効性は、今後の検証に待つしかないが、この報告でいうスティグマ現象と佐藤が論じている排除との位置関係を確認しておくことは、お互いの性格を明らかにするのに有意義だろう

佐藤の排除は、ここでいうスティグマ現象のある部分とリンクする<sup>30</sup> / この報告での議論は、やりとりの中での「ふつうでなさ」の達成に注目するが、そうした達成はもちろん、ときに佐藤がいうような排除につながるだろう<sup>31</sup> / が、もちろんそれは必然ではない、そうなるときもならないときもある (ゴフマンのスティグマ論を差別論と等号で結ぶことはできない)

なお、佐藤の議論のもっとも野心的な部分は、排除を未然に防ぐ「ワクチン」についてのものだが、この部分は、相互行為的ノーマライゼーションの一つの方策として、この報告の路線に取り込んでいくことができそうである / ただし、この点についてはとくに注意を払う必要があると思うのだが、佐藤の議論もこの部分に入ると、個別的なもののほうにシフトしている / 排除を呼びかけるディスコースごとに、個別的にそれに対処するワクチンを作る必要があるというのである (一般理論化の限界?)

(i v) (i i) のような方策によって相互行為の「ふつうさ」を作り出そうという発想に対して、その偽善性を指摘する人もいるかもしれない / たとえばカヴァーリング——「そんなことに腐心して達成される受容は、本物ではない見せかけの受容だ」という批判があるかもしれない (と、筆者が勝手に想像する) / かりにそんな批判があったとして、それでは、「ほんとうの受容」とはどんなものなのだろうか / 山口 (2003) が指摘するとおり、ゴフマン的な相互行為観をとる者にとっては、あらゆる受容はつまるところ見せかけ (phantom) の受容なのである / 相互行為的ノーマライゼーションに意識的になるということは、やりとりといういとなみを守るにあたって、だれかに一方的にそれを守るコストを払わせるといったことはやめようという、いわばやりとりの協同主義ともいうべき感受性に道を開くことでもあるだろう

#### [参考文献]

Adorno, Theodor W., Else Frenkel-Brunswik, Daniel J. Levinson, and R. Nevitt Sanford. 1950. *The Authoritarian Personality*. Harper and Brothers. (田中義久・矢澤修次郎・小林修一訳『権威主義的パーソナリティ』青木書店 1980.)

Ainlay, Stephen C., Gaylene Becker, and Lerita M. Coleman. 1986. *The Dilemma of Difference: A Multidisciplinary View of Stigma*. Plenum.

赤川学. 1999. 『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.

Allport, Gordon W. 1954. *The Nature of Prejudice*. Addison-Wesley. (原谷達夫・野村昭訳『偏見の心理』)

---

<sup>30</sup> ただし、佐藤の議論では、スティグマ属性としばしばスティグマ化に使われるようなカテゴリーといったものは、重要ではない。何かが使われて、それを契機に、被差別者を排除する差別者と共犯者の同盟ができれば、それでいいのである。文化的カテゴリーなどくそくらえ、というこの立論は、一般理論としていっそ清しい。

<sup>31</sup> したがって、排除はそれが行われるか行われるかのどちらかであり、排除がある状態とない状態は連続体ではありえないが、スティグマはそうではない。その点を、中河 (2006) では混同して、柄本 (1992) の「常人—スティグマ保有者統一体」概念を批判したが、これは誤りだった。ここで、撤回したい。常人—スティグマ化された連続性やゴフマンのいう「normal deviance」について、整理して考えるには稿を改めるしかないが、印象としていえば、人が連続体 (統一体) であるというより、人がさまざまな状況をくぐるというほうが妥当ないい方ではないかと思う。

培風館 1961.)

Angrosino, Michael V. 1992. "Metaphors of Stigma: How Deinstitutionalized Adults See Themselves." *Journal of Contemporary Ethnography* 21: 171-199.

Becker, Howard S. 1963. *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*. Free Press. (村上直之訳『アウトサイダーズ——ラベリング理論とはなにか』新泉社 1978) .

Blum, Nancy S. 1991. "The Management of Stigma by Alzheimer Family Caregivers." *Journal of Contemporary Ethnography* 20: 263-283.

Blumer, Herbert. 1969. *Symbolic Interactionism*. University of California Press.

Cahil, Spencer E., and Robin Eggleston. 1995. "Reconsidering the Stigma of Physical Disability: Wheelchair Use and Public Kindness." *The Sociological Quarterly* 681-698.

Conrad, Peter, and Joseph W. Schneider.1980. *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness*. [Expanded Edition. Temple University Press. 1992.] (進藤雄三監訳『逸脱と医療化——悪から病へ』ミネルヴァ書房 2003.)

Corrigan, Patrick, and Robert Lundin. 2001. *Don't Call Me Nuts: Coping with Stigma of Mental Illness*. Recovery Press (The University of Chicago center for Psychiatric Rehabilitation).

Crocetti, Gino. M., Herzl R Spiro and Iradji Siassi. 1974. *Contemporary Attitudes toward Mental Illness*. University of Pittsburgh Press. (加藤正明監訳・石沢雄司訳『偏見・スティグマ・精神病』星和書店 1978.)

Crocker, Jennifer. 1999. "Social Stigma and Self-Esteem: Situational Construction of Self-Worth." *Journal of Experimental Social Psychology* 35: 89-107.

Coulter, Jeff. *The Social Construction of Mind*. Macmillan. (西阪仰訳『心の社会的構成——ウィトゲンシュタイン派エスノメソロジーの視点』新曜社 1998.)

Davis, Fred. 1961. "Deviance Disavowal: The Management of Strained Interaction by the Visibly Handicapped." *Social Problems* 9: 120-132.

柄本三代子. 1992. 「『常人—スティグマ保有者統一体』概念, その示唆するところ——Goffman の『構造』の展開可能性」『ソシオロギス』16号: 87-100.

Falk, Gerhard. 2001. *Stigma: How We Treat Outsiders*. Prometheus.

Gardner, Carol Brooks. 1991. "Stigma and the Public Self: Notes on Communication, Self, and Others." *Journal of Contemporary Ethnography* 20: 251-262.

Francis, David, and Stephen Hester. 2004. *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*. Sage.

Foucault, Michel. 1961. *Histoire de la Folie*. Librairie Plon. (田村俣訳『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社 1975.)

Garfinkel, Harold. 1963. "A Conception of, and Experiments with, "Trust" as a Condition of Stable Concerted Action." in *Motivation and Social Interaction*. Edited by O. J. Harvey. The Ronald Press, 187-238.

----- . 1967. *Studies in Ethnomethodology*. (山田富秋他訳「アグネス, 彼女はいかにして女になり続けたか」(抄訳)『エスノメソロジー——社会学的思考の解体』せりか書房 1987 所収.)

Goffman, Erving. 1959. *The Presentation of Self in Everyday Life*. Doubleday Anchor. (石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房 1974.)

----- . 1963. *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice-Hall. (石黒毅訳『スティグ

- マの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房 1970 (2001).)
- . 1974. *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. Harper & Row.
- Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein. 1990. *What is FAMILY?* Mayfield. (中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳『家族とは何か——その言説と現実』新曜社 1997.)
- Hacking, Ian. 1995. *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Sciences of Memory*. Princeton, NJ: Princeton University Press. (北沢格訳『記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム』早川書房, 1998.)
- 速水奈名子. 2006. 「身体社会学とゴッフマン理論」『コロキウム 現代社会学理論・新地平』2号: 80-102 新泉社.
- Heatherthorn, Todd F., Robert M. Kleck et al. (eds.). 2000. *The Social Psychology of Stigma*. The Guilford Press.
- Herek, Gregory M. (ed.). 1998. *Stigma and Sexual Orientation: Understanding Prejudice Against Lesbians, Gay Men, and Bisexuals*, Sage.
- Hester, Stephen, and Peter Eglin (eds.). 1997. *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*. University Press of America.
- Herman, Nancy J. 1993. "Return to Sender: Reintegrative Strategies of Ex-Psychiatric Patients." *Journal of Contemporary Ethnography* 22: 295-330.
- Holstein, James A. and Jaber Gubrium. 2000a. *The Self We Live By: Narrative Identity in a Postmodern World*. Oxford University Press.
- . 2000b. *Constructing the Life Course (2nd. Edition)*. General Hall.
- 石井政之. 1999. 『顔面漂流記』. かもがわ出版.
- 石川准. 1985. 「逸脱の政治——スティグマを貼られた人々のアイデンティティ管理」『思想』736号: 107-126 岩波書店.
- 石川良子. 2003. 「パッシングとしての<ひきこもり>」『ソシオロジ』148号: 39-55.
- Jones, Edward E., Amerigo Farina et al. 1984. *Social Stigma: The Psychology of Marked Relationships*. W. H. Freeman.
- 倉本智明. 2006. 『だれか、ふつうを教えてください!』理論社.
- Link, Bruce G., and Jo C. Phelan. 2001. "Conceptualizing Stigma." *Annual Review of Sociology* 27: 363-85.
- Mason, Tom, Caroline Carlisle et al. (eds.). 2001. *Stigma and Social Exclusion in Healthcare*. Routledge.
- Mead, George Herbert. 1932. *Mind, Self and Society*. University of Chicago Press. (稲葉三千男他訳『精神・自我・社会』青木書店 1973.)
- Miall, Charlene E. 1986. "The Stigma of Involuntary Childlessness." *Social Problems* 33: 268-82.
- 三橋修. 1992. 「解説」ロバート・A・スコット『盲人は作られる——大人の社会化の一研究』東信堂 219-244.
- Mittness, Linda S., and Judith C. Barker. 1995. "Stigmatizing a 'Normal' Condition: Urinary Incontinence in Late Life." *Medical Anthropology Quarterly* 9: 188-210.
- Murphy, Robert F. 1987. *The Body Silent*. Henry Holt and Company. (辻信一訳『ボディ・サイレント——病いと障害の人類学』新宿書房 1992.)
- Nack, Adina. 2002. "Bad Girls and Fallen Women: Chronic STD Diagnoses as Gateways to Tribal Stigma," *Symbolic Interaction* 25, 2002: 463-485.

- 中河伸俊. 1999. 『社会問題の社会学——構築主義アプローチの新展開』世界思想社.
- , 2003. 「『翻訳』と法的現実のモザイク——クレイム申し立てアプローチの立場から」日本法社会学会編『法社会学 58号 法の構築』有斐閣 79-97.
- , 2004. 「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」『社会学評論』219号 244-259.
- , 2005. 「逸脱のカテゴリー化とコントロール」宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在』世界思想社 159-173.
- , 2006. 「相互行為場面におけるスティグマ——排除と包摂をめぐる感受概念の経験的有用性と実践的インプリケーション」『スティグマの相互行為的マネジメントと文化的構成の研究』（平成16年度～17年度科学研究補助金（基盤研究(C)）報告書） 1-18.
- 中河伸俊・山本功. 2004. 「社会病理のマイクロ分析」松下武志・米川茂信・宝月誠編『社会病理の基礎理論』学文社 65-81.
- 西阪仰. 2001. 『心と行為——エスノメソドロジーの視点』岩波書店.
- Oliver, Michael. 1990. *The Politics of Disablement*. Macmillan. (三島亜紀子他訳『障害の政治——イギリス障害学の原点』明石書店 2006.)
- 大村英昭. 1979. 「スティグマとカリスマ——『異端の社会学』を考えるために」『現代社会学』12号: 117-144.
- Pinel, Elizabeth C. 1999. “Stigma Consciousness: The Psychological Legacy of Social Stereotypes.” *Journal of Personality Social Psychology* 76: 114-128.
- Sacks, Harvey. 1995. *Lectures on Conversation*. Blackwell.
- 坂本佳鶴恵. 1986. 「スティグマ分析の視角——『人間』であるための諸形式に関する考察」『現代社会学』22号: 157-182.
- 佐藤裕. 2005. 『差別論——偏見理論批判』明石書店.
- Scheff, Thomas J. 1966. *Being Mentally Ill: A Sociological Theory*. Aldine. (市川孝一・真田孝昭訳『狂気の烙印——精神病の社会学』誠信書房 1979.)
- Schneider, Joseph, and Peter Conrad, 1980. “In the Closet with Illness: Epilepsy, Stigma Potential and Information Control.” *Social Problems* 28: 32-44.
- , 1983. *Having Epilepsy: The Experience and Control of Illness*. Temple University Press.
- Schur, Edwin M. 1980. *The Politics of Deviance: Stigma Contests and the Use of Power*. Prentice-Hall.
- Shaw, Linda L. 1991. “Stigma and Moral Careers of Ex-Mental Patients Living in Board and Care.” *Journal of Contemporary Ethnography* 20:285-305.
- 渋谷智子. 2004. 「声の規範——『ろうの声』に対する聴者の反応から」『社会学評論』56号: 435-451.
- Spicker, Paul. 1984. *Stigma and Social Welfare*. Croom Helm. (西尾祐吾訳『スティグマと社会福祉』誠信書房 1987.)
- Suchar, Charles S. 1978. *Social Deviance: Perspectives and Prospects*. Holt, Rinehart and Winston.
- Travers, Andrew. 1994. “Destigmatizing the Stigma of Self in Garfinkel’s and Goffman’s Normal Appearances.” *Philosophy of the Social Sciences* 24: 5-40.
- 須長史生. 1999. 『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』勁草書房.
- 鶴田幸恵. 2004. 「トランスジェンダーのパッシング実践と社会学的説明の齟齬——カテゴリーの一瞥による判断と帰納的判断」『ソシオロジ』151号: 21-36.
- 内田良. 2002. 「スティグマの感情——相互作用過程における精神的傷害の二類型」『ソシオロジ』143号: 55-71.

- 上野千鶴子. 1980. 「異常の通文化的分析」『社会学評論』123号: 31-50.
- 山田富秋・好井裕明. 1991. 『差別と排除のエスノメソドロジー—— [いまーここ] の権力作用を解読する』新曜社.
- 山口毅. 2003. 「スティグマ再考——『見せかけの受容』とその回避をめぐって」『ソシオロギス』27号: 139-154.
- , 2006. 「『正常性の構築』としての排除」『現代社会理論研究』19号: 13-24
- Wahl, Otto F. 1999. *Talking Is Risky Business: Mental Health Consumers Confront Stigma*. Rutgers University Press.
- 渡辺公三. 2003. 『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』言叢社.
- 渡辺克典. 2003. 「相互行為儀礼と言語障害——<気詰まり>を生きる吃音者」『現代社会理論研究』13号: 176-189.
- , 2004. 「相互行為儀礼論の射程——擬似歴史と還元主義を超えて」『現代社会理論研究』14号: 173-183.

\* ゴフマン関連文献(とくに邦文)の探索に際して, 渡辺克典氏の HP ( <http://www.h7.dion.ne.jp/~ktnabe/works.html> ) のお世話になった。付して謝意を表したい。